

批評・紹介

歐洲殊に露西亞における東洋研究史

ウェ・バルトリド著 外務省調査部譯

僕はバルトリドの此書に益を受けた事は夥しい。師友に乏しい商業地に住む僕にとつては、歐洲東洋學を指導して呉れたのは此書だとも云ひたい。類書の少い歐洲東洋學書誌として殊にロシアの研究を廣汎なる範圍に於て、整然として指示して呉れるものは今でも恐らく是れに越すものは無からう。ロシアの大學は良い講義を持つてゐると羨ましがつたものだつた。どうして此書を知つて入手したものかは忘れたが、此書の原初版本を座右にするを得てからは常に参照して喜んでゐた。獨逸譯の出たのも是れ有るかなと思つた。第二

版本が出て之を閲して適當なる増補の施されてゐるのを見て益々貴んだ。だから何度か僕の口は僕の筆は此書を推賞したものである。今に於て此書の譯本を我國に得た事は喜ばざるを得ない。第二版の出たのは一九

二五年で既に十餘年を経た今日ではあるけれども今からでも遅くはない。由來我國ではロシアの東洋學は餘り關心を持たれなかつたのだから、今からでも本書によつてその全貌を知る事は必要で、實に凡例に調査部第三課が云ふ如く「本書はそのテーマにおいてユニークであるのみならず、殊にロシア人の東洋經略史と東洋研究史に全體の半ばを割いてゐる關係上、我國東洋學徒のみならず政治外交の實際家に教ふところ決して些少なからざる」ものがある。敢えて上梓された盛意に佩服する所以である。

譯本であるから原本と對照して批評すべきであるがそんな必要も無からう。言語に堪能なる外務省の仕事であるからソツも無い筈である。又僕にも今は精讀する閑暇が無い。然しある必要から譯書の四六九頁を讀んでゐると、九行目に「中世のウイグル人の殘滓は西支那及び蘇州と杭州とを結ぶ道の南方に残つてゐる」と云ふ文句があつた。これは奇怪な話である。原文を持出さなくとも是は「中世のウイグル人の殘滓は西支那、肅州と甘州とを結ぶ道の南方に残つてゐる」の誤譯である。肅州甘州を蘇州杭州と音譯を誤つたから、

「及び」を衍入せざるを得なくなつたものである。一斑を以て全貌を推すすると譯文を危ぶまざるを得なくもなるが、是れ必ず白璧の微瑕に過ぎなからう。僕の讀んだ所文では他は明晰暢達であつた。

此書の原本には索引が有つたが、本書では省いてある。然し本書の性質上から云へば何等かの索引は附してある方がよい。人名だけでも地名だけでもよいのだ。全然削除したのは如何かと思はれる。

参考文献の擧げ方は親切に譯してあるが、著書の刊行地年月迄譯したのはどうであらうか。此等は原文の儘の方が分り易い。又論文の出た雜誌名は原文の儘の方がよい。叢書名も同様だ。さうでないといと混雜を生ずる恐れが少くない。而してそれも學界通用のものに近づけたかつたと思ふ。外務省も少くとも我學界と多少統制をとつてもいいではないか。

凡例の二にバルトリドの學歷を略叙してゐるが、既に故人であるから故人らしく書く必要がある。あれでは故人たるを知らない様に見える。僕が龍谷大學論叢に先生の弔傳を書いてからもう七八年にもなるんだ。あれは勿々の間に書いて委細を盡さない恨みがあるが

もう今の調査課なら何とか略傳位は卷頭に飾れたものと思ふんだ。

誤記か誤植かと思はれるものも二三目に觸れたが、大體に於て立派な印刷物で、流石官廳の出版物である。只官廳の出版物は由來一般の手に入り難い事が多い。そんな事は成るべく便宜にして一般に流傳させてほしいものだ。それが又出版の目的でもあらう。

Friedrich Weller,

Der gedruckte mongolische Kenjur
und die Leningrader Handschrift.

本論文はフリードリッヒ・ウエラア氏が獨逸東洋學會雜誌(ZDMG)一九三六年第九十卷(新編第十五卷)第二號に出だせるもので、その目的は蒙文甘珠爾の清朝殿板と露都鈔本との價值を證定するに存するも、據證する所は一にその收録する所の梵動經一本である。

然れ共爾來蒙文書誌學は極めて不備にして精細なる研究殆んどなきに拘らず、ウエラア氏の此論は微を究め幽を發し、小を推して大に至る。蒙文書誌學界に於ては空谷の跫音と稱すべきもの、ウエラア氏の梵藏兩學